

戦国大名の家中抗争

父子・兄弟・一族・家臣は

なぜ争うのか？

渡邊大門

身近な者同士が
命懸けで戦った！

最新
研究

戦国大名の本質が明らかになる
父子、兄弟、当主と家臣間の争い。

戦国大名の家中抗争

父子・兄弟・一族・家臣はなぜ争うのか？

渡邊大門

星海社

297



SEIKAISHA
SHINSHO

十五世紀後半以降、わが国は内乱状態となり、各地の戦国大名が争った。その中には領土の拡大を目指し、国境を接する大名同士の戦いもあったが、家督かどくの継承や家の主導権をめぐる抗争も存在した。

戦国大名は家督を継承することにより、領国を支配しうる権限を得た。通常、当主が亡くなると、嫡ちやくなん男が家督を継承する。しかし、嫡男が病弱だったり、支配者としての才覚に欠けていたりすると、家督を継げないこともあった。そういう場合は、次男以下の男子が家督を継ぐのだが、ときに兄弟や一族で家督をめぐる争うこともあった。

ほかにも抗争に至るケースはある。当主の没後、家督を継承した男子が幼い場合は、有力な家臣が支えた。しかし、本来、幼君を支えるはずの家臣が野心を抱き、謀反むほんを起こすことがあった。もちろん、幼君でなくても、当主が無能な場合、家臣が家乗つ取るべく謀反を起こすケースは珍しくない。

ほかにも類例を挙げるとキリがないが、大名は他国の大名と戦うだけではなく、家中に敵がいることもあったのだ。先に幼君の例を挙げたが、ほかにも親子間、兄弟間、大名当主と家臣間などバリエーションは豊富である。いかに戦国大名といえども、決してその地位は安泰ではなかったのである。

本書で取り上げたのは、いわゆる「御家騒動」、おいえさうどう「下剋上」げこくじょうと称されるものである。従来、「御家騒動」、「下剋上」については、その原因が負けた側にあるとされてきた。負けたのは、その人物が無能であったから、あるいは問題となる行動が多かったので、家臣らから見放されても仕方がないなどの理由付けがなされたのである。

そうした理由の多くは、信頼度の落ちる二次史料に書かれたものが多い。勝者が親、兄弟、主君を討った理由を正当化すべく、敗者をおとし貶める言説を広めたと推測される。改めて彼らが抗争を繰り広げた理由を検討すると、それぞれの大名家によりさまざまで、そう単純ではなかったと考えられる。

同時に重要なのは、戦国大名権力の問題である。戦国大名と云えば、家臣や領民を絶対的な権力で従わせているようなイメージがあるが、それは必ずしも正しいとは言えない。戦国大名権力は、当主の一族や家臣の支持により成り立っていた。戦国大名当主が一族や

家臣にとって、利益をもたらす存在であれば問題なかったが、そうでなければ存在意義や価値がなかった。

戦国大名当主が「無能」と判断された場合、当主の一族や家臣は謀反を起こし、自らが当主の座に就くか、新しい当主を擁立した。詳細は本文に譲るが、それが血を分けた親子や兄弟であつても、激しい抗争を繰り広げた。家中抗争の結果、勝者は敗者を徹底して粛清し、家中の引き締めを図つたのである。

本書は信頼できる史料や先行研究に基づき、なぜ親子、兄弟、当主と家臣間などで権力争いが生じたのか、検討したものである。なお、本文中の史料の現代語は、著者によることをあらかじめ申しあげておく。

目次

はじめに 3

第一章 実子がなかつたために起きた抗争

19

細川政元

上杉謙信

妻を娶らなかつた大名 20

細川政元とは 20

管領になつた政元 22

- 一人目の養子を迎える 24
- 明応の政変 26
- 政元の奇行 27
- 政変後の政元ともう二人の養子 29
- 政元の最期 31
- その後の澄元と高国 33
- 澄元と高国の最期 35
- 上杉謙信とは 37
- 子がいなかった謙信 39
- 景虎と景勝 41
- 謙信の死と家督相続問題 44
- 御館の乱の勃発 45
- 景勝の反撃 48
- 戦後処理とその後 51

第二章

親子で主導権を争ったケース

55

武田信虎・信玄父子

斎藤道三・義龍父子

親子で争う事例 56

武田信玄とは 57

父・信虎とは 58

信虎の評価 60

信虎は悪人だったのか 61

現実味がある信虎と国人・家臣との確執 64

斎藤道三とは 66

道三の謀略 68

義龍は道三の実子だったのか 70

道三と義龍の戦い 73

道三の最期 75

この章の主要参考文献 77

第三章 当主と家臣の抗争 79

赤松義村と浦上村宗

大内義隆と陶晴賢

島津義久と伊集院忠真

宇喜多秀家と家臣団

当主と家臣の争い 80

赤松義村とは 81

義村を支えた家臣 83

洞松院尼の登場 84

義村の時代 86

義村と村宗の反目 87

惨敗した義村の動向 90

義村の最期 93

大内氏とは 95

大内義隆の登場 97

文芸にのめり込んだ義隆 98

陶晴賢の挙兵 100

陶晴賢の敗死 103

島津氏とは 105

島津氏の弱体化 107

伊集院幸侃の暗殺 109

庄内の乱の勃発 111

家康の意向と島津氏の凋落 113

宇喜多秀家とは 116

騒動の経緯とは 117

襲撃犯は誰だったのか 120

負担となった過酷な検地 121

宇喜多家を退去していた家臣 123

問題となった宇喜多氏家臣団の統制 125

宇喜多氏が抱えた課題 127

騒動に関与した家康 128

政治路線をめぐる対立 131

この章の主要参考文献 133

第四章 親が子を殺した事件 135

武田信玄・義信父子

徳川家康・信康父子

豊臣秀吉・秀次父子

親と子はなぜ争うのか 136

武田義信とは 137

事件の経緯 138

異母弟・勝頼の結婚 140

事件の背景 142

徳川家康とは 143

松平信康殺害事件の経緯 144

自主的に信康らを殺した家康 146

豊臣秀吉とは 149

秀吉の養子となった秀次 150

平坦でなかった秀次の道のり 152

秀次と一の台の結婚 154

秀次の最期 155

皆殺しにされた家族 158

この章の主要参考文献 159

第五章 当主死後の後継者争い 161

毛利元就と相合元綱

今川義元と玄広恵探

当主の急死が招く不幸 162

毛利元就とは 163

家督継承の問題	164
尼子氏との関係	165
家督争いの経過	167
就勝のこと	168
勝算があつた元就	170
今川氏親とは	171
氏親の晩年と寿桂尼	172
誰が『今川仮名目録』を制定したのか	174
「女戦国大名」寿桂尼	177
寿桂尼の立場	179
花倉の乱と寿桂尼	180
注目すべき「岡部文書」の記述	182

織田信長・信勝・信広兄弟

浦上政宗・宗景兄弟

伊達政宗・小次郎兄弟

なぜ兄弟で揉めるのか 188

織田信長とは 188

まったく違った二人の性格 190

歓迎されなかった信長 191

秀孝殺害事件への対応 193

信勝の謀反 195

- 兄弟・一族との戦い 197
- 信光の不審死 198
- 信広を許した信長 200
- 浦上政宗・宗景兄弟とは 201
- 自立した浦上兄弟 202
- 東進した尼子氏への対策 204
- 兄弟の激しい戦い 205
- 兄弟の和解 207
- 伊達政宗とは 209
- 右目を失明した政宗 210
- 元服した政宗 211
- 伊達家の事情と小次郎 213
- 政宗毒殺未遂事件 214
- 事件の背景を考える 216

この章の主要参考文献
219

おわりに
220

第一章 実子になかったために起きた抗争

細川政元

上杉謙信

妻を娶らなかつた大名

わが国の長い歴史において、男子は早い年齢（十五・十六歳）で結婚し、後継者を残すことが大きな責務だった。それは、武家だけでなく公家も同じことで、正室だけでなく側室を迎えることも珍しくなかつた。むろん、結婚して正室を娶り、さらに側室を多数迎えたとしても、必ず後継者たる男子が誕生するとは限らなかつた。その場合は、養子を迎えて後継者に据えるのである。

後継者が生まれるか、生まれなにかは運もあるが、そもそも結婚をしないという戦国大名は極めて珍しい。その中でよく知られているのは、細川政元と上杉謙信である。この二人は生涯にわたって妻を娶らず、一生を独身で過ごした。

政元はいちおう後継者を定めたが、殺害されたあとは養子が家督をめぐって争った。一方の謙信は後継者の指名をしなかつたので、当人の没後は養子が家督をめぐって抗争を繰り広げた。以下、その実情に迫ることにしよう。

細川政元とは

文正元年（二四六）、細川政元は勝元と山名宗全（持豊）の養女（山名熙貴の娘）の子とし

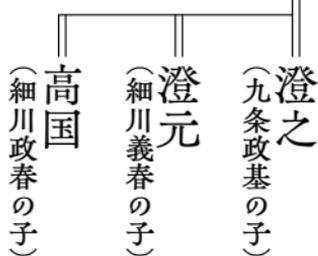
て誕生した。幼名は細川京兆けいちょうけ家が代々名乗る聡明丸そうめいまるだったので、将来が嘱望されていたのは明らかである。勝元が宗全の養女を妻に迎えたのは、明らかな政略結婚だった。当時、勝元は有力守護の山名一族との関係を強化していたからである。

政元が誕生した翌年の応仁元年（一四六七）、応仁・文明の乱が勃発した。勝元と宗全は政略線をめぐって決裂すると、東西両軍に分かれて激しく対立し、全国の守護を巻き込んで戦った。戦いは長期に及び、地方に波及して収束する気配を見せなかった。戦い開始から六年後の文明五年（一四七三）三月、宗全が七十歳で病没し、あとを追うかのごとく五月に勝元が四十四歳で亡くなった。乱の当事者が亡くなったにもかかわらず、戦いは終結しなかった。

同年八月、政元はまだ元服を済ませていなかったが、勝元の後継者として幕府に出仕することになった。しかし、まだ幼かったので、一族の細川政国まさくにが後見としてサポートした。一方の山名氏は、政豊まさとよが山名氏の家督を継いでいた。こうして文明六年（一四

◎細川家略系図

勝元——政元



※ 〓は養子

七四、山名氏・細川氏ともに後継者が揃ったところで和睦が成立した。とはいえ、これで完全に戦いが終わったわけではない。畠山氏などは和睦後も義就よしひろと政長まさながが争っており、京都市中での戦いが完全に収束するのは、文明九年（一四七七）を待たなくてはならなかった。

管領かんれいになった政元

文明十八年（一四八六）七月、政元は畠山政長の後任として、初めて管領に就任したが、その事情はいささか変わっていた。当時、政元は二十一歳の青年だった。政元は足利義尚よしひさの任右大将拝賀の式典に際して、畠山尚順ひさのぶ（政長の子）の供奉くぶを認めるよう義尚に進言した。しかし、義尚は尚順の供奉を拒否したので、政元はその日のうちに管領を辞めると申し出たのである。

これには、もちろん事情があつた。応仁・文明の乱の際、勝元が支援していたのは畠山政長だった。そのような理由から、政元は政長の子の尚順を自邸で元服させ、義尚の任右大将拝賀の式典に参列させようと考えていた。それを義尚に拒否されたので、すっかりへそを曲げてしまったのである。

結局、義尚の任右大将拝賀の式典は準備が整わず、また天皇の体調も優れなかったので

延期となった。同年七月二十九日、式典は挙行されたが、政元は式典を終えると、すぐに管領を辞任したのである。同じことは、のちにも繰り返された。

長享元年（二四八七）七月二十日、文明から長享に改元（しやうしよ）が行われた。改元は朝廷だけで完結するのではなく、幕府に改元詔書（しやうしよ）が送達され、吉書始（きつしよはじめ）を行うことが必要だった。同時に、管領の沙汰始も行われることで、武家でも新しい年号が使用されたのである。ところが、当時は管領を務める者がおらず、不在だったので政元が就任した。一連の儀式が終わると、政元はその日のうちに管領を辞任したのである。

延徳二年（二四九〇）七月、足利義植（よしたね）（義材（よしき））が義尚の死去に伴って、新しい將軍に就任した。新將軍が就任すると、判始、評定始（ひやうじやう）、沙汰始を執り行うのが慣例だが、その際に管領が不在ではまずかった。そこで、またもや政元は儀式を執り行うためだけに管領に就任し、終わると即座に辞任したのである。

政元は管領家の出身であるにもかかわらず、常時、管領に在任することはなく、儀式のときだけ一時的にその座に就いた。こうした例は非常に珍しく、政元にいかなる考えがあったのか不明である。

一人目の養子を迎える

政元の生涯に転機が訪れたのは、長享元年（二四八七）のことである。この年、將軍の足利義尚は、近江国守護の六角高頼を討伐すべく出陣を決意した。高頼は義尚の近臣の所領、諸寺社の所領を押領したので訴えられていたのだ。同年九月、義尚は政元らを従えて近江に出陣したが、戦いは思うに任せず、長享三年（二四八九）に鈎（滋賀県栗東市）で病没した。

義尚には子がなかったので、次の新將軍が誰になるのか注目された。日野富子（義尚の母）や畠山政長が次期將軍の候補として推したのは、足利義視（義政の弟）の子の義植（義材）だった。一方で、政元が推薦したのは、堀越公方の足利政知の子で天龍寺香嚴院の清晃（のちの義澄）である。結局、新將軍に就任したのは、義植だった。新將軍の人選をめぐって揉めたこともあり、政元は義植や政長と距離を置くようになった。

延徳三年（二四九二）二月、政元は摂関家の九条政基の子を養子に迎えた。当時、まだ三歳だった養子には、細川京兆家の嫡流たる聡明丸の名が与えられた。のちの澄之である。なぜ、この時期に政元は九条家から養子を迎えたのだろうか。將軍になれなかった義澄の母と政基から受け入れた養子（澄之）の母は、ともに武者小路隆光の娘だった。つまり、政元はこうした関係を利用して、さらに義澄との連携を深めようとしたのであろう。

同年三月、政元は京都を出発して、東国に向かった。政元は越後を経て奥州に向かい、そこから伊豆国を経由したのちに京都に戻る計画だったが、義植から帰還命令が出たので断念した。政元が旅に出た目的は、足利政知と面会したうえで、関東管領の山内上杉氏との連携を深めようとしたからだった。しかし、越後国守護の上杉房定に奥州下向を妨害され、政知も同年四月に病没したので、政元の目論見は失敗に終わったのである。

政元は将来的に義植を將軍の座から引きずり下ろし、義澄を新しい將軍とする計画を持っていたという。その際、自らの後継者に澄之を据え、堀越公方には政知の子の潤じゅん童子どうじを付ける予定だった。この計画は、後述する明応の政変へとつながったのである。その布石は、ほかにも打たれていた。

政元は新將軍を誰にするのかをめぐって、畠山政長と争ったこともあり、政長の敵の畠山基家もとしいえ（義就の子）に急接近した。政元は天竺てんじく氏から養女を迎えると、基家に嫁がせたのである。これは政略結婚であり、政元と基家の関係は深まった。政元は基家だけではなく、幕府政所まんどころの執事（長官）を務めていた伊勢貞宗さだむねとも通じていた。ほかにも名前は詳しく記されていないが、政元は自らの計画を実現させるため、多くの大名の協力を取り付けていたという。

明応の政変

延徳三年（一四九二）八月、義植は政長に対して基家の討伐を命じ、以後もたびたび河内国への出陣命令を下した。政長は義植を將軍に推してくれた恩人なので、その要望に応えたのだろう。明応二年（一四九三）二月、ついに義植自身が基家を討伐すべく、河内国に出陣することになった。

義植の出陣を受けて、政元は計画を着々と実行に移すべく、政変のスケジュールを協力する人々へと通知した。同年四月二十二日、政元は義澄を遊初軒（ゆうしよけん京都市右京区）に移すと、山尚順の邸宅など、義植与党の人々の居宅を襲撃した。政元がクーデターを実行すると、それまで義植派だった日野富子が政元を支持した。富子は將軍だった足利義政の後家であり、政治への発言権を持っていた。富子が政元を支持したので、義植は不利になった。

同年閏四月、政元は畠山政長を討つべく、河内国に軍勢を派遣した。政長は正覚寺（しょうかくじ大阪市平野区）に籠って防戦したが、呆気なく落城した。その後、政長は火を放って自害して果て、子の尚順を紀伊国に逃がしたのである。政長の配下の者は、ことごとく討たれるか、降参する運命をたどった。

義植は政元に降参すると、足利家重代の小袖を引き渡した。この小袖は、足利將軍家の

家督を意味する重要なものだったので、義植は自ら將軍の座を降りたことになる。政元は義植を龍安寺りょうあんじ（京都市右京区）に幽閉し、讃岐国小豆島に流そうと考えた。しかし、同年六月、義植は悪天候に乗じて龍安寺を抜け出し、越中国に逃れたのである。

義植は、越後上杉氏、能登畠山氏、加賀富樫氏とがし、越前朝倉氏の協力を得ていたので、政元は義植を討つべく軍勢を能登国に派遣したが、それは失敗に終わった。対する義植も義澄と政元を討つ計画を進めたが、結局は実現しなかったのである。

政元の奇行

明応三年（一四九四）十二月二十日、義澄の元服式を執り行うことになった。その際、重要な加冠役（烏帽子親えぼし）を務めることになったのが、ほかならない政元である。ところが、元服式の当日になって、延期が決定した。その理由とは、政元が普段から烏帽子を被っておらず、嫌がったという他愛ないものだった。とはいえ、烏帽子を被らないというのは、当時の人々にとって異様なことだった。

平安時代以降、烏帽子を被ることは庶民の間にも普及し、やがて烏帽子を被らないことは恥ずかしいことであるという観念が生じた。烏帽子を被らないのは、よほどの低い身分

の者か、元服前の者に限られていた。したがって、烏帽子を取られたり脱がされたりすることは恥辱であり、喧嘩になることも珍しくなかったのである。

結局、延期となった元服式は、十二月二十七日に挙行され、続けて義澄は將軍宣下を受けて、晴れて將軍となった。これら一連の行事の遂行には管領の存在が欠かせなかったので、政元は管領に就任したが、これまでと同じくこの日限りで辞任したのである。

政元は烏帽子嫌いという例を挙げたが、奇行で知られる人物だった。越後を経て奥州に向かったことは先に取り上げたが、管領になるような人物がそのような長旅に出ることは、極めて異様としかいいようがない。

政元は修験道や山伏の修行に傾倒しており、そのことは「京管領細川右京大夫政元ハ、四十歳ノ比マデ女人禁制ニテ、魔法・飯綱ノ法、アタコ（愛宕）ノ法ヲ行ヒ、サナカラ出家ノ如ク山伏ノ如シ。或時ハ経ヲヨミ、陀羅尼ヲヘンシケレハ、見ル人身ノ毛モヨタチケル」と『足利季世記』という史料に書かれている。

政元が修験道に凝っていたことは、『後慈眼院殿御記』明応三年九月二十四日条に唐橋在数の話が記されている。その話によると、政元は安芸国の山伏「司箭」なる者に上洛を命じ、鞍馬寺（京都市左京区）で兵法を習った。それを世の人は、「天狗の法」だと噂していたと

いう。「司箭」は、以後も政元に近侍した記録が見える。ただし、政元は修験道を信仰や個人的な趣味としてではなく、各地を転々とする山伏を活用し、各地の情報を得ようとしたとの指摘がある。

『足利季世記』には、政元が「四十歳ノ比マデ女人禁制」と書かれているので、四十歳を超えた時点で女性との交わりを避けなくなったと解される。また、政元は摂津国守護代を務めていた、配下の薬師寺元一もとかずと男色の関係にあったといわれている。元一は永正元年（一五〇四）に政元の命により自害するが、その際の辞世は「地獄には　よき我主の　あるやとて　今日おもひたつ　旅衣かな」である。「我主」は「若衆」のことを意味し、政元の男色趣味を揶揄しているとの指摘がある。

政元が生涯を独身で通した理由については、修験道に凝っていたこと、男色趣味があったことが想定される。

政変後の政元ともう二人の養子

明応の政変後、政元は守護代を山城国、大和国、河内国へ派遣し、領国化を進めた。山城国は畠山基家が守護を自称し、その配下に遊佐氏ゆさがいたので、政元は赤沢朝経あかさわともつねを送り込

んで撃退させた。そして、山城国下五郡の守護代に香西元長を任じたのである。以降も政元は、版図を広げること余念がなかった。

このような状況になっても、政元の後継者問題が懸念された。先に触れたとおり、政元は後継者の候補として、九条家から澄之を養子に迎えていた。ところが、澄之は他家から招いたもので、細川氏の血筋になかったため、細川氏の内衆（家来）は後継者に相応しくないと考えた。内衆は政元の配下として支えていたので、決して無視できない存在だった。

文亀三年（一五〇三）五月、政元の配下にあった薬師寺元一は、阿波国の守護で細川一族の細川成之に面会し、成之の孫の澄元を政元の養子としてもらい受けたいと交渉した。澄元の父の義春は若くして亡くなったので、成之が親として育てていた。澄元は、延徳元年（一四八九）の生まれである。澄元には兄の之持がいたので、この話はスムーズにまとまった。元一は養子縁組に際して、政元の命を受けていたと考えられ、自ら主導して進めたのである。政元には、もう一人高国という養子が存在した。高国は、文明十六年（一四八四）に細川政春の子として誕生した。政春は備中国守護を務めており、かつて兄の勝之（生没年不詳）は勝元（政元の父）の養子になっていた。しかし、勝元の死後、家督を継いだのは政元だった。澄之、澄元が政元の養子になった時期は明確であるが、高国に関しては不明である。

これにより、政元の養子は計三人になったのである（高国は養子候補に止まったという説もある）。

政元の最期

政元は薬師寺元一との関係が悪化したので、その勢力を削ぐべく、摂津国守護代の職を取り上げようとした。そこで、元一は政元に対抗すべく、当時、周防国すおうで庇護されていた反政元派の足利義種、そして阿波細川家と連携を強めた。永正元年（一五〇四）九月、元一は赤沢朝経と協力し、政元を廃して、養子の澄元を細川京兆家の家督に据えようとした。クーデターである。政元は元一の反乱を鎮圧したが、阿波細川家との関係も悪化したので、澄元を後継者に指名し、同年十二月に元服式を執り行つた。

以降、政元をめぐる政治情勢は暗転の一途をたどっていった。同年十二月、対立していた畠山尚順（政長の子）と畠山義英よしひで（基家の子）が和睦し、義英は反政元の立場を明確にした。永正二年（一五〇五）五月、政元は阿波細川家を討つべく、四国に軍勢を送り込んだが、讃岐国で敗北を喫した。この敗北が政元に転機をもたらした。

永正三年（一五〇六）二月、三好之長ゆきなが養子の澄元とともに上洛した。政元は澄元を後継者

に据えることとし、之長を自らの軍勢に加え、対立していた阿波細川家と和解したのである。ところが、政元に従っていた内衆は、之長ら阿波勢の登用を歓迎しなかった。やがて、内衆は阿波勢と対立し、政元、澄元をも排除しようとした。その結果、内衆は政元から見捨てられた澄之を推戴し、政元、澄元、阿波勢との抗争を繰り広げたのである。

永正四年（一五〇七）六月、政元は入浴中に内衆の竹田孫七、福井四郎らに襲撃されて落命した。彼らに政元の殺害を指示したのは、薬師寺元一の弟の長忠ながただ、香西元長といった面々である。その直後、内衆の軍勢は澄元邸を急襲し、之長ともども近江国に追いやると、澄之に細川家の家督を継がせたのである。

敗勢濃かつた澄元だったが、徐々に態勢を立て直すと、政元の養子の高国のほか、細川政賢まさかた、細川尚春ひさはるらが味方として加わった。細川家一門は、九条家の流れを汲む澄之が細川京兆家の当主となることを歓迎しなかった。同年八月、澄元らの軍勢は、澄之の邸宅に攻め込み、内衆の香西元長、薬師寺長忠らとともに死に追いやったのである。こうして、澄元は晴れて政元の跡を継いだ。

その後の澄元と高国

政元と澄之の死後、残った二人の養子の澄元と高国はどうなったのだろうか。

澄元は澄之の死後に家督を継いだ^が、安泰は長く続かなかつた。時機をほぼ同じくして、周防・長門の大内義興の庇護下にあつた足利義植が上洛するとの風聞が流れた。永正五年（一五〇八）三月、高国は義植と通じ、突如として伊勢国に出奔した。高国は澄元の政治手腕を批判し、父の政春とともに叛旗を翻したのである。

同年四月、高国と義植が上洛することを知った澄元は、自らの不利を悟り近江国へ下向した。引き続き、義澄も和泉国堺（大阪府堺市）へ逃れた。高国のもとには細川家の根本被官こんぽんひかが集結しており、澄元に勝ち目はなかつた。同年五月、義植は高国を細川京兆家の家督に据えらると、翌月に悲願の上洛を果たしたのである。同年八月、澄元は義澄の命により阿波国へ戻り、再起の機会をうかがうことになった。

永正六年（一五〇九）十月、義澄は刺客を遣わして、義植の屋敷を襲撃した。義植は軽傷で済んだこともあり、翌年二月に近江国に軍勢を派遣して、義澄を攻撃したのである。大将を務めたのは、細川尹賢ただかた（高国の従兄弟）だったが、大敗を喫して多くの被官を失った。

永正八年（一五一一）六月、澄元と細川政賢らは大軍勢を率いて、阿波国から摂津国を経由

して上洛した。その際、近江国に逼塞ひつそくしていた義澄も上洛し、ともに協力して義植と高国を討ち果たす作戦だった。同年八月、政賢らが京都に攻め込むと、義植と高国は戦うことなく丹波国へ逃亡したが、ここで意外なことが発覚した。

澄元と共同歩調を取るはずだった義澄は、同年八月十四日に近江国岡山(滋賀県甲賀市)で亡くなっていたのである。義澄の死を知った義植と高国は、ただちに反撃を開始した。同年八月二十四日の船岡山(京都市北区)の戦いで、政賢らの軍勢は高国と戦って敗れ、政賢は討ち死にした。義澄の死と船岡山の戦いの敗戦により、澄元の威勢は大きく削がれることになった。その後、しばらく澄元の姿は、史料上から消える。

こうして高国と義植は安泰に見えたが、その綻びほころびが明らかになる。永正十年(一五二三)三月、義植は高国との関係が悪化したので、近江国甲賀(滋賀県甲賀市)に出奔したが、諸大名の執り成しによって関係は回復した。永正十五年(一五二八)一月に高国の父の政春が亡くなる
と、義植とともに上洛していた大内義興が同年八月に周防国へ帰国した。高国は、意気消沈したことだろう。

澄元と高国の最期

永正十五年九月以降、雌伏の期間を過ごしていた澄元は、「打倒高国」を悲願として、諸国のさまざまな勢力との協力体制を模索した。永正十七年（二五二〇）一月、京都市中で土一揆が勃発し、義種の御所が放火された。ちょうど高国が京都を留守にしていたときだった。同年二月、高国方の越水城（兵庫東西宮市）が落とされ、高国方の不利が明らかとなった。その後、高国は近江国坂本（滋賀県大津市）へと逃亡した。

同年二月、澄元は義種に詫びを入れた。その翌月には、澄元の配下の三好之長が上洛したこともあり、義種は澄元を細川京兆家の家督にすることを承認した。この直後、高国は近江国守護の六角氏の支援を得て、ただちに巻き返しを図って上洛を果たしたのである。高国が京都に攻め込んだので、澄元は京都から脱出した。ところが、之長は高国の軍勢に捕らえられ、知恩院（京都市左京区）で自害して果てた。同年六月十日、高国に敗れた澄元は、失意のうちに病没したのである。

澄元が亡くなったので、義種は高国を頼ることになった。しかし、義種は高国の横暴に耐えられなかったのか、和泉国堺に出奔し、さらに阿波国へ落ち延びた。そこで、大永元年七月、高国は足利義晴（義澄の子）を新將軍に擁立したのである。高国と義晴との関係

は、比較的良好だったという。

大永六年（一五二六）七月、高国は細川尹賢（ざんげん）の讒言（ざんげん）を信じて、配下の香西元盛（もともり）を殺害した。これにより、波多野種通（たねみち）（元盛の兄）と柳本賢治（かたはる）（元盛の弟）の兄弟は、高国に対して兵を挙げた。この動きに呼応するかの如く、細川六郎（澄元の子。のちの晴元）の配下の三好勝長（なが）・政長が阿波国から和泉国堺へ渡海し、そのまま京都に侵攻した。不利を悟った高国は、大永七年（一五二七）二月に義晴とともに近江国に逃れたのである。

このとき、三好元長（之長の孫）が足利義維（よしつな）（義澄の子。養父は義植）と細川晴元（澄元の子）を擁立し、堺に「堺幕府」を樹立したのである。翌享祿元年（一五二八）十月、高国は義晴とともに上洛し、元長と和睦交渉を行うが失敗し、再び近江国へ戻った。その後の高国は、赤松政村（のちの晴政）の配下の浦上村宗（うらがみむらむね）の支援を得て、巻き返しを図ろうとした。

享祿四年（一五三三）六月、高国は摂津国天王寺（大阪市天王寺区）で三好元長らの軍勢に敗れた。高国は村宗と政村の支援もあったが、政村は父の敵である村宗を討つべく、元長の軍勢に内応することを決めていた。そのことが高国の敗因だった。敗れた高国は大物（だいもつ）（兵庫県尼崎市）まで逃れ、広徳寺（こうとくじ）で自害したのである。

上杉謙信とは

享祿三年（一五三〇）、上杉謙信は長尾為景の子として誕生した。幼名は虎千代で、その後は景虎、政虎、輝虎と改名するが、煩雑になるので「謙信」で統一する。

謙信には晴景という兄がおり、天文五年（一五三六）に長尾家の家督を継いだ。謙信は嫡男ではなかったため、当初から家督を継ぐとは考えられていなかった。そのような事情から、謙信は林泉寺（新潟県上越市）に入り、天室光育のもとで修行したのである。天文十二年（一五四三）に謙信は還俗すると、元服して景虎と名乗った。

その翌年、越後の国衆が晴景に対して反乱を起こした。その際、謙信は晴景を助けて、初陣にもかかわらず越後の国衆を撃退した（栃尾城の戦い）。この勝利により、謙信の評価が高まった。天文十四年（一五四五）、今度は越後を支配していた上杉定実の家臣・黒田秀忠が晴景に挙兵した。しかも秀忠は、謙信を擁立する形で、晴景に戦いを挑んだのである。やがて、この戦いは越後の国衆を巻き込み、謙信派と晴景派に分かれて争った。

天文十七年（一五四八）、定実の仲介もあって、晴景は謙信を養子に迎えたうえで、長尾家の家督を譲ったのである。こうして謙信は、春日山城（新潟県上越市）に入った。その二年後、定実が後継者を残さず死去したので、ときの將軍の足利義輝は謙信を事実上の越後の国主

に定めた。同年、上田長尾氏の長尾政景まさかげが謙信の家督相続に異議を唱えて挙兵したが、翌年には鎮圧することに成功した。政景は謙信に従うことになり、越後は統一されたのである。

苦勞の末に、謙信は有力な戦国大名の一人に数えられるようになった。では、謙信とはいかなる人物なのだろうか。

謙信は伝統や権威を重視し、熱心に毘沙門びしゃもんてん天を信仰する一面があった。しかも性格は、潔癖かつ実直であったという。それだけではない。養子の景勝かげかつに習字の手本を与えたり、和歌などの文芸にも通じたりにしているなど、心優しく教養ある人物であったといわれている。非のうちどころがないとでもいえようか。

一言で言うならば、謙信は伝統を重んじるタイプの人間といえるかもしれない。朝廷との接触や室町

◎上杉家略系図

(長尾)
為景

謙信

景虎

(北条氏康の子)

景勝

(長尾政景の子)

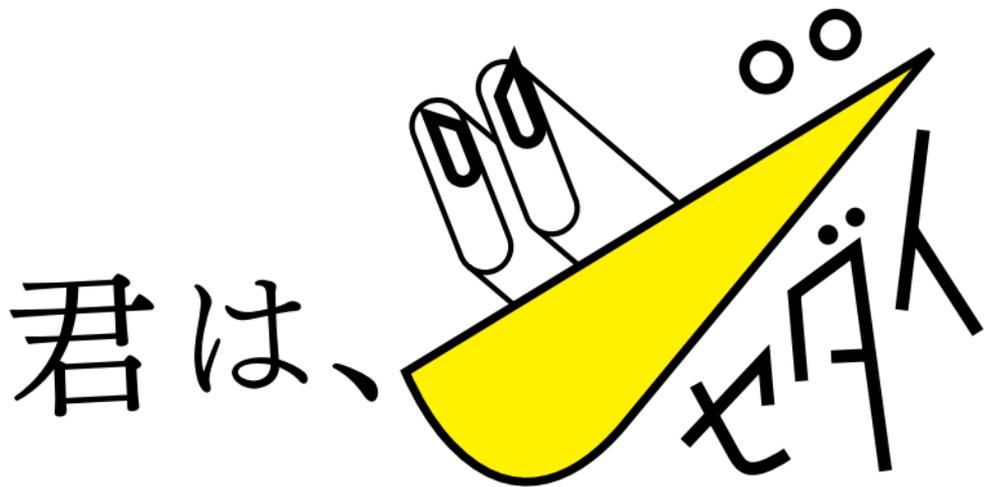
景国

(村上義清の子)

義春

(畠山義統の子)

※ 景虎は養子



何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ **ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!